現代のことば

蝉時雨―「時」の変奏曲

小原克博

日本には三十種類ものセミがいるが、その鳴き声と名前を一致させることのできるセミはどのくらいいるだろうか。アブラゼミ、ミンミンゼミ、ヒグラシなどはわかりやすいかもしれない。しかし、どのようなセミであれ、その生態に触れることは都会の生活の中では難しくなりつつある。

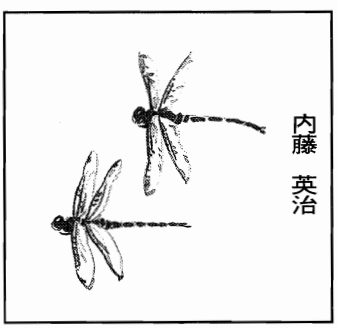
私は少年時代、典型的な虫取り少年であった。夏休みになると、早朝、昼間、夜と時間を問わず、山の中を歩き回ったものだ。主な目的は、クワガタやカブトムシ獲りであったが、その最中、何度となく、セミの脱皮に立ち会うことがあった。

地中から這い出てきた幼虫は一時間近くかけて脱皮する。そして羽が乾き、体色が黒くなるまで、さらに一時間近くかかる。この時間のかかるプロセスに、なぜか私の目は釘付けになり、セミと同じように木にへばりついて、脱皮の様子を見守った。長い地中生活を経て、みしみしと言わんばかりに自らの殻を破って姿を変える変態プロセスは、好奇心をかき立てただけではない。その経験は、じっくりと待ち、時が満ちることを味わう原体験を与えてくれたように思う。

「時は満ち、神の国は近づいた」。これはイエスによる宣教の最初の言葉であるとされている。イエスは蝉時雨を経験することはなかっただろう。しかし、イエスの言葉の中には植物の生長や自然の機微に触れたものがきわめて多く、「時が満ちる」という原風景がイエスの経験の中に多彩に刻まれていたことを感じさせる。その満ちゆく「時」の感覚を新約聖書は「カイロス」と呼び、時計やカレンダーによって管理される「クロノス」と区別をしている。

現代社会は圧倒的にクロノスが支配的であると言えるだろう。時間管理は人生成功のための処方箋とされる。予定表をくまなく埋めることができなければ不安を覚える若者が多いとも聞く。大量の情報をいかに効率よく処理できるか、その速度によって人の価値が計られる。勉強してよい学校に入れ、と子どもをせっついている大人を見ると、脱皮の時（カイロス）を待ちかまえている幼虫の背中を無理やりこじ開けようとしているかのようにさえ思うことがある。

じっくり待つ、立ち止まる、ということが、かくも難しい時代において、自然界の小さな息づかいを感じ取ったり、自らの身体の内に宿る固有の生命のリズムを慈しむことは簡単ではない。カイロスの経験は、クロノスによって著しく侵食されている。



内藤　英治

脱皮したセミは、たかだか一週間程度しか生きることができない。また同様に、クロノスは刻々と私たちの寿命を削り取っていく。しかし無慈悲とも言える生の現実の中で、カイロスの経験は生命が変化し、成熟することを教えてくれる。

カイロスの原体験を持つことによって、人は何度でも新しい生への「脱皮」の希望を持つことができるのではないか。蝉時雨に耳を傾けながら、ふとそのような夢想が、少年時代の思い出とともに頭をよぎった。

（同志社大教授・キリスト教思想）